リモートで支え合いマップの作り方

　コロナ禍のため、支え合いマップ作りが難しくなった。コロナが終息するのには、まだしばらく時間がかかるようだ。となると、この困難な時代にも適応できるマップ作りの手法を開発する必要がある。

　今回、試験的に実施してみたのが、私・木原が、遠隔地のマップ作りの現場とリモートで結んで、聴取するという方法である。やはり、工夫次第では、ある程度の成果は見込めることが分かった。その方法を紹介しよう。

⑴マップを作る地区の実態把握（現地で）

①マップ作りをする対象地区（50-70 世帯が目安）を決定。
②その地区に在住、またはその地区に関わっている世話焼きさん、世話役さん、各組織の長などを選出。
③その地区内の「気になる人」の情報を、あらかじめ関係機関等から入手したものをもとに、その人たちから聴取する。男女、年齢、気になる内容（要介護等）、できればその人に関わっている人も。
④入手した情報を、その地区のマップ（模造紙大以上の大きさ）に記入しておく。

⑵聴取者と地元スタッフの打ち合わせ

①情報を記入したマップをもとに、当日どういうことを聴取したらいいのかを、聴取者（木原）と地元のスタッフ（社協）で協議しておく。聴取の順番も、ある程度決めておく。
②聴取者と地元スタッフの間で、地域福祉の考え方や、マップ作りの狙い等について、あらかじめすり合わせをしておくと、もっといい。聴取に際しては、特に現場での聞き取り役は、聴取者の意図を汲んで、直接住民に相対する役を担うため、どのような福祉をめざすのかといったことを心得ておく方が、マップ作りがスムーズに進むのは間違いない。
③時間配分についても、スタッフのだれかが責任を持って判断する。それをある程度決めておかないと、たいていの場合、聴取したいことの一部しか、こなせないということになりかねない。
④得られた情報をもとに、マップ作りに参加してもらう人を選出する。基本的には、

マップ作りをする範囲内に在住の住民で、住民同士の関わり合いをよく知っている主婦など。できる限り世話焼きさんが入っていることが望ましい。

⑶地元（社協）スタッフの役割分担

①１人目は全体司会とマップへの記入役、２人目は住民への聞き取り役、３人目はボードへの記入役、４人目はzoomにつないだカメラの操作。
②これらの２つ以上を１人で兼務するのは難しい。できるかぎり４人で分担する。
③カメラの操作も重要で、固定したカメラで全体を映すのではなく、テレビカメラのように、住民が発言している時はその人をズームし、次はその情報をマップに記入している記入者の手元をズームするというようにすることで、リモートでも現場の状況が聴取者（木原）に伝わり、マップ作りがしやすくなる。
④聞き取り役は、聴取者の意図を汲みながら、住民から重要な情報を聞き出す力量が求められる。ただ淡々と聞くだけでは、住民の本音の部分は引き出せない。

⑷会場設定

会場の前方には、①マップ（できる限り大きいもの。模造紙大以上）、②zoomでつないだ聴取者の映像、③ホワイトボード（出てきた情報を記入する）が並ぶ。そしてマップの前にマップの記入役、ホワイトボードの前にボードの記入役がいて、カメラの担当者は会場内を自由に動き回る。

マップ作りに参加する住民は、マップから少し離れたところに横１列、または２列に、間隔を空けて並ぶ。メモをしたいという人もいるので、机を用意してもいい。住民は、発言する時に前に出てマップを指さしてもいい。

⑸進行

①２回を１単位のマップ作りとする。それぞれ２時間半とる。まず１回目は、聴取者による簡単な講義（助け合いのまちづくりとマップ作りについて１５分程度）をして、その後がマップ作り。１時間が経過したら休憩。後は終了まで一気に進める。
②休憩している間に、残り時間と、残った聴取項目を照らし合わせて、時間配分を考える。
③２回目は、１回目に出てきた情報を整理して、取り残したものや、もっと聞きたいことなどを決めておいて、それを提示する。目的は助け合いのまちづくりだから、その目的に従って、１回目に出てきたものから、どんなまちづくりが考えられるかを構想し、その具体的な構想を提示するということになる。

⑹情報整理

①重要なことは、ただマップを作ったという実績を作るのでなく、そこからまちづくりのヒントを抽出し、それを組み合わせて、まち全体としてのまちづくりのヒントを抽出することである。
②たった一回のマップ作りだが、それなりに一般化できる情報やアイデアが出てくるはずだから、前項で述べたようなまちづくりの構想を組み立て、それを住民に提示するのだ。

⑺課題への取り組み

①マップ作りは目的ではない。福祉のまちづくりのテーマをマップ作りから引き出して、それを実践するのが最終目的である。
②それも、１つか２つ取り組んで終わりというのも物足りない。あくまでまちづくりが最終目的だから、そちらへ向かって、出てきた複数の課題に取り組むべきである。